真というのはなかなか難しい．ただ虫を撮ればいいのではない，ということが解ってきた．最近よくいわれる，自然環境や人の生活も含めた自然の多様性の問題だ．虫を撮るとき，この多様性を感じることができる写真を撮っていかなければと思っている．以前から感じていたことだが，このことを最も強く感じたのは，『私たちの川ー竹野川の自然とくらしー』の出版に係わったときだ．自然環境や風景，さらに人の生活まで，なんでも撮ることだと思いはじめた．ただし懐と相談のうえでだが．

実は最近，普通種を対象に“身近な自然にいる虫”を撮っている．きっかけは子どもが通っている保育園の関係者などから，子どもたちが持ち込む虫についていろいろな質問を受けたり，相談されたりしたことだった．但馬のフィールドではほとんど対象にしてこなかった虫たちだ．

名前が判らないといって持ち込まれるチョウやガの幼虫，庭木や花など園芸植物につく虫など，これまで気にもしなかった虫たちが写真の対象となる．イラガのなかまには何種類かあり，繭の形や作る場所も違う．カマキリも種類ごとに卵嚢の形が違い，成虫との組み合わせがおもしろい．知っているつもりが知らなかったり，意外な習性に気がついたり，案外新鮮な発見や驚きがある．

これらの虫を対象にすることで，時間が限られていても，短時間で撮影でき，日常の生活のなかでも継続できる．そしてなによりも，時間をかけて遠方へ出かけなくても，虫と自然に関わりを持ち続けられる．保育園や学校の行事，家族連れのお出かけや，子どもたちとの散歩の合間，時には仕事の出先で，撮っている．写真のテーマとしても幅広くておもしろい．今の私の条件に合わせて虫と付き合おうということだ．もちろん，時間のゆるすかぎり但馬へも行く．私にとって20年間通い続けた但馬は，基本であり原点だからだ．

しばらくはこんなやりかたで，但馬との付き合いが続きそうだ．

但馬むしの会が結成されて20年たった．最後に，容姿は変わっても，但馬の虫と自然に対する思いを変わらずに持ち続けている会員のみなさんに，敬意を表しておきたい．

ムカシトンボに魅せられて

山崎　喜彦

（1）ムカシトンボとの出会い

私にとってムカシトンボとの出会いは，1982年の上田尚志氏との出会いにより始まる．故郷但馬に帰ってきた私は，最初蝶を中心に昆虫全般の採集を始めようとしていた．そんなある日，「和田山町糸井渓谷にはムカシトンボという珍しいトンボが生息している」と豊岡高校の先輩である上田氏より教えていただいた．それまで私はトンボには全く興味がなく，標本箱には１個体のトンボ標本もなかった．1982年の春に糸井渓谷でダビドサナエを採集し，上田氏に「これがムカシトンボですか」と聞きに行ったほどであった．

（2）ムカシトンボに魅せられて

ムカシトンボは，トンボ類の中でも特徴のある古い形態や生態を持つため，「生きた化石」と呼ばれている．また，日本の重要な昆虫類の１種にも指定され，環境保全状態の良い森林の指標生物としても注目されている．かつては但馬でもその生息が確認された場所は少なく，大変珍しいトンボとされていた．

私がムカシトンボと関わりをもった最初の発見は，産卵痕であった．もちろん，その植物がオタカラコウという名前であることは知らなかったし，トンボが植物に産卵することさえ不思議に思えた．知らないことを知りたくなるというのは，誰しも同じであろう．私のムカシトンボへの興味・関心は次第に高まっていった．

私のムカシトンボ調査は，1983年から本格的になった．糸井渓谷を中心に，まずは成虫の行動観察と産卵調査を行った．特に力を入れたのが，オタカラコウの分布状況と産卵場所との関係であった．渓流を歩きながらオタカラコウを見つけては，葉柄を１本１本確認し，産卵しているかどうかを調べるのである．産卵痕の発見の喜びは大きかったが，産卵痕数を数える度に足はしびれ，辛抱のいる調査であった．糸井渓谷ではオタカラコウ以外にワサビ・ウワバミソウ・ウバユリ・フキへの産卵も確認された．しかも，ムカシトンボは上流域から下流域に行くにつれ，対象となる植物の生育状態に合わせて，産卵植物を変えているのには驚いた．

その後は，ムカシトンボにとりつかれたように成虫・幼虫・産卵について無我夢中で調査・観察に明け暮れた．１年間に100日以上，糸井渓谷に出向いた年もあった．

羽化時期に渓流沿いの杉の幹に羽化殻を見つけたときは，うれしさで舞い上がってしまった．成虫の行動観察では，和田山中学校科学部の生徒たちに糸井渓谷の主な出現場所に立ってもらい，同時に目撃個体の数や時刻・行動等を記録した．幼虫と産卵痕の確認は，出現期間の短い成虫に代わり，生息場所の確認に大変役立った．とりわけ，幼虫期間が約６年間と長いため，さまざまな齢の幼虫が年間を通して生息しており，但馬での生息状況を把握するのに大変有効であった．幼虫を中心とした調査を重ねるにつれ，ムカシトンボは但馬各地の山間渓流にごく普通に生息していることが分かってきた．調査は大変だったが，ムカシトンボへの情熱が私を行動させた．私の頭の中にムカシトンボが棲んでいたのだ．

しかし，残念なことに糸井渓谷に1989年に巨大な砂防ダムが建設された．ムカシトンボの成虫が多く飛び交っていた国指定の天然記念物であるカツラの木の100mばかり上にである．この工事のために成虫の往来する渓流もコンクリート２面張りの水路となり，岸辺に生えていた多くの植物が姿を消した．

（３）トンボ全般へ興味が広がる

いつものように糸井渓谷でムカシトンボの調査をしていたある日，関西トンボ談話会の東輝弥氏に偶然出会った．彼は「人と自然の博物館」に標本展示するムカシトンボの採集に来られたとのことであった．今年は兵庫県北部（但馬地方）に焦点を当てトンボ調査を行っているので，入会し調査活動に参加しないかと誘ってくれた．トンボ全般については全く知らない私であったので，次の調査会から参加した．

私のトンボ狂いに拍車をかけたのが，この談話会である．本当に，トンボを愛する人々の集まりであり，そのエネルギーはすごいものである．成虫・幼虫・産卵痕・羽化殻・卵を採集する人，それぞれが専門家である．採集は全くせず，写真だけを撮っている人もいる．行動を共にするだけで，多くの知識を与えられたり刺激を受け，元気が出た．その後，但馬各地の山間渓流だけでなく，河川・池・湿地などに出かけることが多くなり，私の活動はトンボ全般の成虫や幼虫の採集に移った．

こんな折，トンボに関する大変良い本が出版された．『日本産トンボ幼虫・成虫検索図説』（東海大学出版会）である．この本の登場によって，幼虫・成虫の種の検索が容易にできるようになった．嬉しい限りである．さらに，1996年には北海道大学出版会から，新しい図鑑が出版される予定である．今から楽しみである．

最近，ムカシトンボから少々遠ざかってしまった．渓流を訪れることより，但馬各地の池を訪れることの方が多くなった．ヒヌマイトトンボの調査で円山川下流域の河川や池を頻繁に調査した．その後，体調を崩し２年間は何もできないでいる．元気になったら，出石川のキイロヤマトンボの調査をしたいと思っている．

昆虫採集との出会いから現在まで

黒井　和之

昆虫採集をするようになったのは，中学１年生の夏休みに入って間もない頃だったように思う．そのきっかけとなったのは，近くに住む一人の上級生がネットを持って裏山の草地で蝶を採集していたのに刺激されたことである．その頃は，毎日のように自然を相手に野山を駆け回っていた時代であった．その行為自体がそれまでになかった新しい遊びのようにうつり，興味半分と夏休みの宿題（課題）だった自由作品を作ることを目的に，同じ集落に住む遊び仲間たちと採集するようになった．

その当時に使っていた採集用具はまったく粗末なもので，ネットは魚を捕るタモにシーツを縫いあわせてなんとか蝶を採集できるように手作りをした．三角紙は普通の紙，展翅板も手作り，標本箱にいたっては既製の紙箱だった．それらすべてが身のまわりにあった有り合わせのもので，当時はそれが普通で，それらが市販されているなど考えもしなかった．図鑑だけは作りようがなかったので，保育社から出版されていた原色図鑑を買ったのが２年後だったと思う．それまでは種名の同定などは仲間たちからの知識に頼っていたようで，何もわからずただやみくもに採集していたようだ．

１年目の採集は夏休みの７～８月の２カ月だけで，おもにアゲハ類やそのころ多かったタテハチョウ科のヒョウモン類などを採集していた．２年目の早春に仲間のひとりから紙に包まれたコツバメを見せられたときは，季節を変えればこんな種類も採れるのかと軽いショックを受けた．このとき，蝶のなかには年１回春にだけ出現する種がいることを知り，家の裏山でコツバメを，またネギの花に来ていたウスバシロチョウをいくつか採集した．

高校に進学する頃になると，それまで一緒に採集していた仲間たちは皆やめてしまっていて，その後はだんだんと興味が薄らいでしまい採集することが少なくなってしまった．その当時の標本やラベルは今ではまったく残っていないが，それまでの３年間で自分の住む集落周辺